

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月22日現在

機関番号： 12613  
 研究種目： 基盤研究（C）  
 研究期間： 2009～2011  
 課題番号： 21520242  
 研究課題名（和文） 冷戦期リベラル文化の再検討—冷戦言説が隠蔽するイデオロギーと文化言説  
 研究課題名（英文） Rethinking the Cold War Liberalism—The Discourse of Culture and the Cold War Suppression of Ideologies  
 研究代表者  
 越智 博美（OCHI HIROMI）  
 一橋大学・大学院商学研究科・教授  
 研究者番号：90251727

## 研究成果の概要（和文）：

冷戦初期の文学作品や西部劇映画の分析や、文学をめぐる言説・批評の変遷、および文化政策等の分析をつうじて、冷戦期の政治・文化言説が、社会なき文化という概念によるアメリカ性の把握を促進し、それが同時代のアメリカ文学研究、アメリカ研究、新批評による文学教育の制度化に影響を与えていたこと、また、社会なき文化という概念が、同時代の文学、大衆小説、映画、ポピュラー・カルチャー一般に広く流布されていたことが、検証された。

## 研究成果の概要（英文）：

This project focused on the idea and rhetoric of liberalism of the literary works and films of the early Cold War era, and also on the discursive transformation of literary criticism and the US cultural policies from the 1930s to the early stage of the Cold War, so as to find: the discourse of the Cold War encouraged the identification of America as a culture without society, which played a crucial role in the contemporary institutionalization of the study of American literature, American study, and the education of English based on the paradigm of New Criticism, and the idea of the culture without society is discovered also to be prevalent in the contemporary serious and popular fiction, movies, and popular culture in general.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：アメリカ文学・アメリカ文化

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米・英語圏文学

## 1. 研究開始当初の背景

従来冷戦は、フランシス・フクヤマの「歴史の終わり？」からサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」に至る議論まで、一般的に自由主義対共産主義という「イデオロギー」の対立としてとらえられてきたが、それ自体に疑問を持ち、またそのような二項対立が何

を産み出し何を隠蔽していたのかをいったん探ることにより、現在の新自由主義の系譜化の契機としたいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は50年代、60年代のアメリカの文学、

文化、思想を批判的に再検討し、

1) 当時の言説が決して「イデオロギーの対立」としては自身を表象せず、むしろ自由主義がイデオロギーから自由であるという「非イデオロギー」として扱われていたことを証明したうえで、

2) 文化政策という観点から、非政治的であることを標榜する文学批評をはじめとする文化言説が、非イデオロギーという冷戦イデオロギーを支えていたことを検証し、最終的には、

3) 冷戦とポスト冷戦の峻別が隠蔽する思想的連続性、すなわちアメリカの覇権主義の萌芽を、冷戦時代の言説構造のなかに同定することを目指す。

### 3. 研究の方法

上記の考察のための作業を、文学作品、映画、公文書館記録等々さまざまな資料にあたりつつ行う。また、定期的に研究会を開催する。

具体的には、

1) Daniel Bell, Arthur Schlesinger, Lionel Trilling らの代表的な冷戦期の知識人の著作を分析することより、冷戦期リベラリズムの非イデオロギー性とその男性性、およびアメリカの自己定義に迫る。三浦は、上記知識人の分析に加えて、Richard Right, J.D. Salinger、あるいは西部劇の作品に冷戦リベラリズム、およびネオリベラリズムの萌芽を見て取りその成果を論文等として発表することをめざし、越智は南部農本主義知識人の動き方の分析をすることにより、冷戦リベラリズムを南部とモダニズムという件から明らかにすることを目指す。

2) 上記の証明に資する視座を獲得するべく、冷戦期のアメリカが構想し実行した文化政策を調査し、アメリカが国内外に向けて策定し伝播を目指した自国イメージを考察する。担当は越智で、具体的には国立国会図書館、米国国立公文書館、米国議会図書館の図書や一次史料を調査して GHQ が日本に輸出しようとしたアメリカ文学のラインナップを確認し、それを支える発想にアメリカ文学をめぐるどのようなイデオロギー、自己定義が発見されるかを検証する。

3) 三浦担当により、ポスト冷戦を視野にいれ、1~4の視座を出発点としながら 50年代、60年代のアメリカ文学（『オーギー・マーチの冒険』（Saul Bellow）、『ジャンキー』（William Burroughs）、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（J. D. Salinger）、『ロリータ』（Vladimir Nabokov）、『冷血』（Truman Capote）、『アメリカの夢』（Norman Mailer）、『路上』（Jack Kerouac）における移動、狂気、他者を、当時の文学作品の分析から定位し、その「時代的特徴」が冷戦期の封じ込め

文化の文脈とどのように関係するかを考察する。最終的には現在の観点から非イデオロギー化されたイデオロギーである自由主義を通じた「アメリカ的な管理社会」の成立として読み直しをはかる。

### 4. 研究成果

当初の目的を達成することができた。具体的には、以下の点がおもな達成事項である。

上記の目的1)については、越智は、アメリカ南部知識人が非イデオロギー化を文学批評から実現した経緯について学会発表をおこない（学会発表4）、それを文章化した（雑誌論文2）。南部農本主義は、一見すると封建時代のイングランドを奉じている反動政治に思われるが、そこには「文化」概念が色濃く裏打ちされている。彼らの文化がエリートイズムに彩られた、超然とした態度による文学鑑賞のスタイルを評価し、また同時にジャンルとしては T.S.Eliot を中心としたモダニズム詩を礼賛していたこと、また農本主義を捨てて文学批評家となったときには、農本主義時代の「文化」観にむしろ整合的な新批評を立ちあげていったことを確認した。さらには彼らがファシストと批判され、また戦時に「動員」されることを拒むことを無責任とも非難された際に、むしろ動員されないこそが非イデオロギー的であり、真の自由を標榜する民主主義的な態度であるとするロジックこそが冷戦期の非イデオロギーとしての民主主義を用意したこと、またこうした議論を Trilling らと Partisan Review の同一の特集で展開していたことを指摘することで、当初の課題に一定の解答を出した。

三浦はリチャード・ライトの *The Outsider* 分析をつうじて、非イデオロギーとしての冷戦の自由主義を論じた。本作品は、ライトがフランス移住後に出版されたため、これまで非アメリカ的な作品という評価を一般に受けていたが、自由を脱政治化したものとして表象するために、主人公が放浪をする物語がこの時期に多数書かれたこと——J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye*、Saul Bellow の *The Adventure of Augie March*、Jack Kerouac の *On the Roads*、William Burroughs の *Junkie / Queer*、Vladimir Nabokov の *Lolita*、Flannery O'Connor の *Wise Blood* など——、これら作品の評価と連動するかたちで Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* の再評価が起きたことを考えるとき、同様のプロットを持ち且つ『ハック・フィン』のパロディとして成立している本作は、アメリカのリベラリズムを描いた作品として理解されるということ論じたのち、冷戦リベラリズム期の文学概念の大枠を形作ったトリリングの『リベラルな想像力』と本作との関係を分析した。そのとき、悲劇としてのこの小説の結末は、ト

リングが代表するような同時代のリベラリズムの文化を舞台設定として使いながら、アフリカ系としてのライトを冷戦期以前に影響をうけていた、反人種差別・反帝国主義の思想としてのマルクス主義の理念がその通底に揺るがしがたく流れていることを指摘した。(雑誌5)

三浦はまた、冷戦期に大流行を見せる西部劇映画を、*Shane* と *High Noon* を題材にしなが、冷戦個人主義の端的な表現として分析した。二つの映画に共有される特徴は、1) 主人公の英雄が個人として戦うのに対し、その敵役が集団として表象されること、2) 物語のプロットはある意味において、主人公が戦わなければならない理由を消していくプロセスであり、最終的に、主人公は「男らしさ」とでも呼ぶ他のない、説明不能ではあるが自身には譲ることのできないなにかのために戦うのであるが、これこそ、イデオロギーではない自由主義を体現する英雄像であること、3) この結構を成立させるために、戦う理由を脱政治化・心理学化するため、異性愛ロマンスが作品プロットに導入されるが、それはあくまで心理学化のための装置であり、主人公は女のために戦うのではないこと等である。自己実現をその究極のゴールとする、このような冷戦個人主義は、この後、フェミニズムや新左翼的な革命の理論に、受け継がれていく。脱政治化が自己実現に変えられた、この新しい政治のロジックはアイデンティティ・ポリティクスの出発点であり、また、それがマルクス主義の隠蔽のために成立したことは、政治に関する現在の議論を考える上でも重要である。(図書3)

これら議論を発展させたかたちで、また、冷戦リベラリズムの文化のひとつの極点として、サリンジャーの *The Catcher in the Rye* を分析した。冷戦リベラリズムについての考察としてこの作品が傑出している点は、まず、作品冒頭において、この作品がリアリズムではないことがはっきりと述べられることである。そして、この冒頭におけるリアリズムの廃棄は、主人公ホールデン・コールフィールドの一人称の語りにおいて、心理的な細部がその最大の魅力として強調されることに結実する。ただし、このイノセントな主人公の設定は、退学させられた高校生が街を放浪する物語から冷戦個人主義の具現になっているが、同時に、その主人公を語りの現在においてある種の狂人と設定することでその批判にもなっている。タイトル・シーンに示される語り手の理想郷が、あらゆる社会性を排した理想の共同体であり、同時に、語り手がそれは不可能であると宣言するとき、われわれは、この作品が、冷戦リベラリズムの社会、社会性、社会主義の排除が、この語りの最終的な批判の対象となっていることに気

づかなくてはならないだろう。(学会発表6、雑誌論文6)

ここまでの内容をまとめると、冷戦リベラリズムと冷戦個人主義の相互関係において、それらが、冷戦の始まりにおける社会、社会性、社会主義の排除を踏まえた、アメリカ文学という制度、アメリカ研究という制度、アメリカ文学研究という制度、そして、新批評を通じた文学教育の制度の誕生の根底に流れるイデオロギーであるという知見が導かれる。冷戦リベラリズム・冷戦個人主義は、ある意味において、戦後の西側諸国が生んだ最大の思想と言っても良いであろう。なぜならそれは、かたちを変えながら、現在の私たちの文化的な想像力を支配しているし、また、冷戦的な想像力に対する批判と思われるものさえもが、冷戦リベラリズムと共にもたらされた「政治」概念の変化のうえに成立しているからである。(学会発表2)

目的2)については、おもに越智が担当し、冷戦初期のGHQの特に関書をめぐる文化政策について論文をまとめたほか、川端康成の英語翻訳と日米安保条約をめぐる関係について発表をおこなった。(図書4、学会発表5)

GHQ 図書館については、国立国会図書館および米国立公文書館の一次史料を使いながら、海外の図書館が米国国務省の文化政策の重点的な施策であったこと、またその図書館のリストが議会図書館や American Library Association といったところに依頼されていたことを突き止めつつ、それらのリストのラインアップを読み込み、いかなるアメリカ像がそこに提示されるのか分析した。また、GHQの図書館についていえば、戦時中に Office of War Information が欧州の情報戦に対応し、また戦後の復興を睨んで設立した図書館を原形として、ドイツ、韓国、日本の三箇所の「占領地」共通の本のリストをもとにその蔵書があったこともつきとめた。(図書4)

川端康成については、川端康成の英語翻訳、「日本的」文学としてのその受容と結果としてのノーベル賞受賞の意味を歴史的文脈のなかで再検討を試みた。朝鮮戦争以降のアジアとの外交政策を決定したアメリカ合衆国の国家安全保障委員会 (National Security Council) の文書 48 が醸成した感情構造とでも言う文脈を措定し、Kawabata をまさしくサンフランシスコ講和条約から日米安保冷戦期に、日本を同盟国とする中で誕生した「モダニズム」文学者として再定位することが可能であることを指摘した。(学会発表5) また、これらの方法論をめぐるワークショップに登壇して、一次資料の調査についてノウハウを共有した。(学会発表3)

目的3)については、現在の新自由主義との連続性、非連続性を視野にいれた考察を行

った。また、月1回の冷戦読書会を行い、他校の研究者も交えて議論を続けて来た。

その過程で、三浦は冷戦初期アメリカ文学と冷戦期のリベラリズムのロジックをネオリベラリズムとつなげる系譜化をおこない、その成果を学会発表、および国内外の査読つきジャーナルに論文を発表した。

ひとつには、新左翼的な思想と連動するかたちで誕生した、新しい文学の形式としてのポストモダニズムは、冷戦リベラリズムの論理である「全体主義批判としての自由の称揚」という枠組みのなかで、現実の福祉国家を批判するものである。最終的に、小さな政府をめざし福祉国家を批判するネオリベラリズムの論理と非常に親和的になるということ、Thomas Pynchon の *Vineland* の分析を通じて指摘した。(雑誌論文3)

冷戦リベラリズムの現代的な反復としてのネオリベラリズムを批判的に理解するとき、なぜネオリベラリズムがいわゆる格差社会をグローバルに誕生させる装置として機能しているかを明快に理解することができる。冷戦が、反ソ連としての政治と社会なきリベラリズムを想像させる契機であったとするならば、90年代以降のグローバル化は、まさしくソ連の崩壊とともに、世界はリベラリズムによってのみ統治されるものとして想像されたのである。この経緯をじつに的確に記述したベスト・セラー小説として J. K. Rowling の『ハリー・ポッター』シリーズを分析した。(雑誌論文1)

マルクス主義の排除を前提としたネオリベラリズムの形象は、その批判として構想された左翼言説が、マルクス主義をどのように排除、変質、脱政治化しているかを検証することで確認される。マイケル・ハートとアントニオ・ネグリの、非常に公汎な影響を与えた『帝国』を読解しながら、彼らが提示しようとする、リベラルなマルクス主義の全体性はどのように確保されるのかを問うことで、われわれの生きる政治的な現在の輪郭を描こうと試みた。(雑誌論文4)

越智はこの視点(上記目的1)、2)の成果)を入れ込みつつこれまでの研究をまとめて著作を発表した。南部農本主義者の文学の政治学がいかに冷戦のリベラリズムと共振し得たのか、最終的には Allen Tate が1952年にパリでおこなった知識人をめぐる演説で、冷戦リベラリズムのロジックが彼らの議論にあることを指摘し、また著作を貫く問題意識としてネオリベラリズムとの系譜化の必要性を述べた。(図書1)同時に、冷戦リベラリズムの源流としてニューディール期に着目した研究発表を行った。「全体主義批判としての自由の称揚」は、ひとつには個人の礼賛というかたちをとる。これがたとえば、アメリカ研究の初期の古典的作品(American

Adam など)に強く出ていることはつとに知られたことである。この点について Robert Penn Warren の *All the King's Men* は冷戦テキストとして読みうるのだが、30年代に書かれた *Night Rider* にその萌芽が見られることを指摘した。(学会発表1)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 三浦玲一、「選択と新自由主義と多文化主義——グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」、『英文学研究』、第88巻、33-47頁、2012年、査読有
2. 越智博美、「アメリカの白いヨーロッパ——南部農本主義者のファシスト疑惑」、『言語社会』、一橋大学大学院言語社会研究科、第5号、62-78頁、2011年、査読無
3. 三浦玲一、「病とヒッピーと新自由主義——トマス・ピンチョン『ヴァインランド』」、『アメリカ研究』第45号、39-56頁、2011年、査読有
4. Miura, Reiichi, “What Kind of Revolution Do You Want?: Punk, the Contemporary Left and Singularity,” *Mediations*. 24.3, Web掲載 (<http://www.mediationsjournal.org/>), 2011, 査読有
5. Miura, Reiichi, “The Cold-War Literature of Freedom and Re-Conception of Race: Richard Wright’s *The Outsider* and Lionel Trilling’s *The Liberal Imagination*.” *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 51, 19-46, 2011, 査読無
6. 三浦玲一、「五〇年代アメリカのモダニズムと帝国主義——『キャッチャー・イン・ザ・ライ』における冷戦リベラリズム」、『言語社会』第4号、113-128頁、2010年、査読無

[学会発表](計6件)

1. Ochi, Hiromi, “Association and/or Aggression: Robert Penn Warren’s *Night Rider*.” Culture of

- New Deal Liberalism: Depression, Popular Front, and Internationalism, an International Symposium, Hitotsubashi University, March 15, 2012
2. 三浦玲一、「冷戦リベラリズムの文化——Richard Wright から J. D. Salinger まで」筑波大学アメリカ文学会 3 月例会、筑波大学東京キャンパス文京校舎、2012 年 3 月 25 日
  3. 越智博美「一次資料調査の面白みと苦心」日本アメリカ文学会全国大会 学会設立50周年企画・本部発題ワークショップ、関西学院大学、2011年10月9日
  4. 越智博美、「南部知識人のリベラル・ナラティブ」、日本英文学会全国大会特別シンポジウム「知識人の作法」、神戸大学、2010年5月30日
  5. Ochi, Hiromi. “Edward Seidensticker as a Cold War Orientalist and His Fashioning of Kawabata Yasunari.” 3<sup>rd</sup> International Conference on Modernism and the Orient, Hangzhou, June 6, 2010
  6. Miura, Reichi, “Liberalism’s Everybody’s Revolution: The Cultural Politics of *The Catcher in the Rye*.” Nagoya American Studies Summer Seminar, Nanzan University, July 25, 2010.

〔図書〕（計 4 件）

1. 越智博美、『モダニズムの南部的瞬間』、研究社、2012 年、324 頁
2. 越智博美、『『国民』の創生——白い男たちの帝国』、中井亜佐子、吉野由利編著、『ジェンダーから世界を読む III』、彩流社、305 頁（170-194 頁を担当）、2011 年
3. 三浦玲一、「合衆国が個人主義の国になったとき女はどうなるのか——冷戦期の西部劇『シェーン』と『真昼の決闘』」、中井亜佐子、吉野由利編著『ジェンダー表象の政治学』、彩流社、299頁（195-218 頁を担当）、2011年

4. Ochi, Hiromi. “Democratic Bookshelf: American Libraries in Occupied Japan.” Eds. Greg Barnhisel and Catherine Turner. *Pressing the Fight: Print, Propaganda, and the Cold War* (Amherst: University of Massachusetts Press) , 285p(pp.89-111 を担当), 2010

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

越智 博美 (OCHI HIROMI)  
一橋大学・大学院商学研究科・教授  
研究者番号：90251727

##### (2) 研究分担者

三浦 玲一 (MIURA REIICHI)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授  
研究者番号：70262920